

博物館 Dictionary No.239

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

紺紙経 — 輝く仏の言葉 —

みなさんは「お経」にどんなイメージを持っていますか？「呪文みたいで何を言ってるのか分からない」「漢字ばかりで難しい」「地味」？ そもそも、お経を聞くこと・見ること自体あまりなく、「お経って何？」という人がほとんどかもしれませんね。

「お経」って何？

「お経」は仏教を開いた人、釈迦(紀元前5～4世紀ごろ。諸説あり)の教えを書き記したものです。ただし、釈迦が自分で書いたものではありません。釈迦が活着ている間、その教えは暗記してインドの言葉で口伝えされました。釈迦が亡くなった後に、初めてその教えが文字で記されるようになります。それはやがて中国へ伝わり、2世紀以降、漢字に翻訳されます。中国で漢字に翻訳されたお経は6世紀に日本へと伝わりますが、その時には翻訳されず漢字のまま受け入れられました(昔の外国語ですから聞いて分からないのは当然です)。多くのお経が「如是我聞」(このように私は聞きました)の言葉で始まっているのは、口頭で教えが伝えられていたことの名残で、お経が釈迦の言葉であることを伝えています。

「お経」は地味？

「お経」は他の書物と同じように、普通、紙に墨で書かれます。ただし、仏の姿をかたどった仏像がさまざまな美しい装飾や花で飾られるように、釈迦の言葉であるお経も信仰の対象として飾り立てられました。料紙(お経を書き写す紙)をカラフルに染めたり、金箔・銀箔を正方形に切った切箔や線状に切った野毛、細かく砕いて粉にした砂子などを散らしたり、草花・蝶や鳥の下絵を描いたり、とてもきらびやかです。このようにさまざまなデコレーションが施されたお経は「装飾経」と呼ばれます。



図1 重要美術品 紺紙金字法華経卷第五 平安時代 11～12世紀 京都国立博物館蔵(守屋コレクション)

「紺紙経」とは？

装飾経にはさまざまなバリエーションが見られますが、数が多く代表的なのは平安時代後期(11～12世紀)、貴族の依頼によって作られた「紺紙経」です。紺紙経とは料紙を藍(タデ科の植物)で濃い紺色に染め、溶かした膠に金粉を混ぜた金泥や、銀粉を混ぜた銀泥、あるいは金泥と銀泥の両方でお経を書き写したものです。

紺紙経は中国・朝鮮半島にもあります。日本では奈良時代(8世紀)より作られており、紺紙に銀泥で『華嚴経』を書写した紺紙銀字華嚴経断簡(二月堂焼経)が今も伝わっています。東大寺の正倉院に伝わった写経所文書によると、金泥で書いたお経は文字を輝かせるため、仕上げに猪の牙で文字の表面を磨いたようです。天平勝宝三年(751)に紫色の紙に金泥で華嚴経80巻を書写する計画では、1400枚の料紙に対し猪の牙35個が用意されています。1個の牙で40紙分、お経2巻と少しを磨く計算だったようです。

なぜ紺と金なの？

紺紙経の多くは紺紙に銀泥で界線(経文を囲む線)を引き、金泥で経文を書写した紺紙金字経です(図1)。なぜ、紺と金なのでしょう？一説にはお経に説かれる七つの宝「七宝」(金・銀・琉璃<ラピスラズリ>・磤磤<貝殻>・馬瑙<エメラルド>・真珠・玫瑰<赤色の宝玉>)のうちの金と青色の宝石である琉璃によると言われています。ではなぜ、七宝のうち金と琉璃なのでしょう？金色に輝く経文と濃紺の料紙のコントラストが美しいからでしょうか？

金が仏を象徴していることは、仏像や仏画の彩色からも連想され、お経にも仏の言葉は「金口」と表現されています。また、紺紙金字で書写されることの多い『法華経』によると、浄土(清らかな仏の世界)の地面は琉璃でできていると説かれています。紺紙金字のお経は清らかな世界と仏を表しているのかもしれませんが。

なお、『法華経』には、「仏の身体は金の山のように端正にして巖かたで何とも言えず美しい。清らかな琉璃の中に純金の像が現われたようである」という喩えがあります。中央アジアで産出される琉璃(ラピスラズリ)は深い青色で、その中に金色をした黄鉄鉱の粒を含みます。もしかしたら、紺紙金字のお経のイメージの源泉はラピスラズリだったのかもしれませんが。



参考写真 琉璃(ラピスラズリ)

(美術室 上杉智英)